

合する事なれば金打と書くなり、金と金とを打合すると云ふ義なり、亦聞ふ、金打する意は如何、答へて曰く、若し誓約に違はば如此大小刀を打ち、打ち折りて二度大小を帯せざる身と成るべしと誓ふ事なり。

*きんちやく

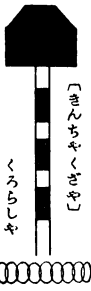
筑紫さいふかヨヤヤヨきんちやくくならばハリノ博多小梅を腰附けに(天神記)

〔市著〕淫賢婦をいふ。但書集賢に「市著」風俗文選・出女説、國國の名目、當世の洒落、柄、干瓢・白人・巾着の類も傾城紫短氣巻三に「市著山百人寺に弘むる新宗」天神記の文は、筑紫宰府に財布をいひかけ、巾着袋に淫賢婦の異稱をいひかけたのである。

*きんちやくさや

花色羅紗の巾着箱、輪違ひの六尺は相州小田原(陸奥)

この文は相模小田原城主の嫡久保傳吉の鎧標と羅紗標をいうたのであらうが、これは花色ではなくて黒羅紗である。



くろらしや

〔運輸〕

きんと

亭主が眼も荒く、まんや玉が頬癖、集禮をきんとにせがまれて、ひしやりほんとしんりはつて(虎が懸)

「きんと」(均等)の「う」の略され水語。左右よく釣合ふ義より轉じて、左に借り右に返すこと。借りた金銀など還へすに早く返すこと。きんちやくめん。「集禮をきんとにせがまれて」は、集禮をきんとに拂つて下されとせがまれての義であつて、謡曲・安宅にある勸進帳の文「思ひを善達に翻して」とあるを作りかへたのである。「集禮」それちからかう大紋白し

て云々」をも見よ。

きんのみ

馬方は遂に見ぬ金の間なうそ、うそとのぞきまはれど(丹波興作)

〔金問〕黄金の箔を貼つた襦を立てた間。

*きんびり

公平のやうな男を煩はしたは、この吾妻(齋宮)の辨慶や公平がえい、やつととのえなど切合ふを見せませつと(丹波興作)

〔公平〕金平とも書き、坂田公時の子である。江戸時代の初期に流行した芝居は、公平剛勇無形であつて、種種の武功を立て、岩石を砕き人形の首を放くことなどを演じた。これより殺伐な同型の浮瑠璃を金平瑠璃と稱した。京阪では寛文二三年頃盛んであつたが早く廢れ、江戸では戦國時代の餘風を受けて、京阪で廢れた後までも流行した。

*きんぷくりん

(雪女)

〔金覆輪〕黄覆輪とも云ふ。馬の鞍の前後の輪(山形)の上に金で覆輪をかけたもの。

きんぼうげ

かへじや千千の命ぼうげ(細道)

〔金毘毛〕毛茸とも書き、草の名。毛茸屬には一年生または多年生もあつて、葉は互生し單葉である。花は單生または數多廣葉して穂房花序をなし、その色は黄または白である。

きんや

禁野を過ぎて波瀲院(輕丸)

〔禁野〕天皇遊獵の地で、人民の殺生を禁じてある野の意で、交野或は片野とも書く。いて河内國北河内郡山田村、牧野村、川越村、牧方町等にわたり、天之川、種茶川、舟橋川の三河川がその間を流れて淀川に注ぎ、低い丘陵が淀川に沿つて起伏してゐる、即ち古の禁野の地である。

く

*くいのやちたび

縁につるれば唐のもの、悔の八千度繰返す(國性爺)一汗さつと流れかへりし橋杭の、悔の八千度百度も(藤袖始)

〔悔の八千度〕八千度は彌千度の義。幾度も幾度も繰返して悔むこと。古今集・哀傷歌に「さきだぬ悔の八千度悲しきは、流る、水のかへりこぬなり」。謡曲・櫻川に「悔の八千たび百千鳥」。

くうふうくわする

空風火水の五輪五行に五大尊(井筒)

〔空風火水空〕は無礙性、風は動性、火は熾性、水は濕性である。これに堅性の地を加へて五大といふ。五大を五形色に表はして五輪と名づく。「五大」五輪を指す。

*くうや

十徳頭巾に身を窶せば人もくうやの茶筌(開八州)

〔空也〕空也上人の始めた空也念佛僧即ち鉢叩をいふ。「はちた、きを見よ」。

くえう

明王部・天童部・九曜・七星・二十八宿五行の靈三十六禽を驚かし奉り(弘徽殿鸚鵡産家)

〔九曜〕日月・水・火・木・金・土の七曜に計都星・彗星を加へていふ。謡曲・總輪に「大小の神祇・諸善隣明王部・天童部・九曜・七星二十八宿を驚かし奉り」。

*くかい

抑最期の一念によつて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なると問ひけれ

ば(女稱)

〔九界〕十界の中、佛界を除き、善隣界より地獄界に至る九界をいふ。これ佛界に對して悉く善隣である。太平記・卷十六、正成兄弟討死の事の條に「抑最期の一念によりて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なると問ひければ」。

*くがい

長へに火宅に遊び、共に苦海に沈む(露地)。法の教によらずんば、苦海に沈みし衆生はさて、何時か生死を出小舟(露地)。まして流れの憂き節や、日毎に變る身の勤め、今日も苦海の神詣(生玉)

〔苦海〕要要は生死の迷妄實際運なければ、これを大海の深淵なるに喩へて苦海といふ。法華經・譬喻品に、「我見諸衆生、没在於苦海」。

*くがい

三人寄れば公界、忠兵衛が身代の棚下してくれる忝い(冥途飛脚)こりや此處は公界ぢやぞ、誰も人の名はいはず、様子はかちやつと言へ(生玉) 遊君はけがらひ人、貧しき體は十郎が外間もはづかし(扇八景) 短氣は損氣の忠兵衛、傾城はくがい者、五十兩の目腐銀取替へた潛上、若い者に恥かかせ、川が開いたら死にたかろ冥途飛脚) 大磯の長が許へくがい十年足掛け二十年と定め、娘分の傾城に賣り渡し(大磯虎)

〔公界世間〕傾城は世の中の種類な人と交はる意より公界人といひ、傾城の勤めを公界の勤めといふ。本朝雜談比事・卷五にも、傾城に十年身を賣ることを述べて「公界十年のさ

言ひければ(冷泉節)
釋尊の涅槃に入られた時頭を北にされた例にならひ、死者を北枕にし、その着て死んだ衣を北向に懸けることから、葬儀を北向にするは病死さきまうとする呪である。
薬もんぢやく

くすりめ 熊野本宮薬の湯を汲み
寄せ(小栗判官)
〔藥湯〕温泉をいふ。宇治拾遺六に、「信濃國つくまの湯といふ所によろづの人のあみける藥湯あり」。地名部「ゆめと」を見よ。

九寸五分 胸押開けは九寸五分、肝
先に切羽まで刺通してぞ居たりける(堀川波敷)
鏑たれども九寸五分、大名でも高家でも胴中を扱つて(兼好)

短刀を云ふ。鐵通。武家名目抄刀部に、「九寸五分。寸をも其名とせしは劔を三寸とふ類にて、圓融院の頃世に一尺三寸と稱せし劔劔あれば、いと早くさる例のありけり」。

くせ くれ又くせの大悲の化身(女殺)
〔救世〕法華經・普門品に、「觀音妙智力、能救世間苦」とあり。より出て、觀世音菩薩をいふ。

くせい 弘誓の海を渡り、涅槃の岸に到るべき(百日曾我)
俊寛が乗るはくせい(女護船)
〔弘誓〕阿彌陀如来が十方の衆生を均しく濟度せうとされる弘大な誓願をいふ。その弘誓の恵みの深廣なるを海に喩へて弘誓の海と云ふ。また佛菩薩が衆生を救済して、涅槃の彼岸に渡し給ふ弘大な誓願を船に喩へて「弘誓の船」と云ふ。

くせごと 旦那の悪性金を十四貫
横取りして曲事に逢ふ筈(淀鯉)
〔曲事〕道まを法に違ふ事。悪事をなせば刑罰に處せられるにより、曲事を處罰の意に用ゐる。

くぜつ 情氣の嵐手管の雨、無理な
口説の霜雪も、騒がす痛まず彌増しに、情の縁はびこりて(生玉)お
夏涙を押し拭ひ、其方と我身は實事にて、口説などする挨拶か(歌念佛)

くせまひ 獨樂の威徳には久しうま
ふが手柄にて、或は曲舞・歌・くどき(松風)
〔曲舞〕歌舞音韻略史下巻に(足利の世に曲舞あり、文正元年四月十六日後法興院記に、是日於千本棧敷、殿有御見物)女曲舞、糸岡通云々、彼女生年十九云々、容顔尤麗、凡越過語人、希代事也、舞拍子言語通斷奇妙、次十四五許兒舞一五人許云々、先男舞靈與、女立合舞之、座者十餘人許也。これにて其大かたを知るべし、又七十一番照人歌合の時代實徳に、白拍子と番ひて、車にて袖うちふりし舞女かかるとひすといはしりきまはかく歌あり、又一月にはつら小倉山其名はかくれざりける」と畫の上記したるは、其うたひ物の中の詞なるべし、此舞を又大頭といへり)と見えぬ。巢林子のこの文は、曲舞をしてゐる間細繼の廻ひ續けるをいふ。

くせも さいりとも懸はくせも
のみな人の地金をへらす焼釘は、
敲き直して意見して(次朝日) 旦那

これ御覽なされ、おまへの印判盜
出し白紙に捺すくせ者(大經師)
〔曲書〕怪し者。くせある者。わるもの。徳興屋本節用集に「怪物」。

くだかけ 曉うらむくだかけの、狐
の夢驚かすくだかけの、其しだり
尾の結ばほれ(淀鯉)
鶏の古名。倭別菜に「くだかけ。東國には家をくだといふと云へり、かけは鶏をいふ也。一説に百濟鶏の義、今の唐九なるべしと云へり、或は鶩を賞して管掛といふ也。粟本千夏の説に「くだかけ」は、鷹鶏の義であつて、「かけ」はその鳴く音によれる名であるといふ。伊勢物語に「夜もあけなば狐に食めなでくだかけの、まだきに鳴きてせなをやりつる」。淀鯉出世實徳のこの文は「春の夜の夢驚かす云々」とも見えぬ。

くだのれん おういと答へて管
篋、顔差入るれば(蛭合戰)
〔管篋〕細い管を糸に貫き連ねて編んで作つた暖簾。往時町の裏通りなどに往々見えてゐたもので、近世には硝子玉を交へて氷屋甘酒屋などに懸けてゐた。管篋は袖籠ともいひ、其稱は西鶴の胸算用巻五にも見えぬ。

くだばる さあ牛はくたばつた
り、火をしづめ侍ども(暖帳天皇)
咽笛つんざきくたばつたるにて候
はん(吉野忠信) 其方が今頓死して
くたばらうが構はぬぞえ(浦島)
くたばるの轉じた語であらう。死ぬ。

くだまく 若し頓死でも致しなば、
下された茶が末期の水と、管まく

くたをまく とかく目めで
出たいと、管を巻いてぞ歸りける(藤原歌)
〔管を巻く〕くたまくともいふ(その條を見よ)。「酒に酔うてたは言をしやべり立てるいふ。按ずるに「言ふもくだ(前條を見よ)の「くだ」はくただしいの略であらうが「くだをまく」は、櫛の學を巻く音の略かといふとから出た詞である。寛平御時后宮歌合、よみ人知らずの歌に「かりがねは風をさむみやはおたりめ、くだまく音のきりきりとする」と見え、また「雁がねのくだまくおとの夜をさむみ、蟲のおりきる衣をぞきる」と見えぬ。

くち 奥を覗き表を見、箱ぐち取つ
て持上ぐれば、ふるうてどうど打
落し(二枚槍) あたゝ粽も皮を取ら
れば旨味は知れぬ、(三國志)
そ皮ぐち賞齋と(三國志)
接尾語「ぐるみ」と云ふに同じ、上方詞である。「箱ぐちは箱ぐるみ。皮ぐちは皮ぐるみ。増補傳言集覽に「ぐち。大阪詞、菓物など皮とも食ふを皮ぐちいふ」。世間娘氣賀(江島其撰撰享保二年刊)五に、「焼たての蒲餅に生醬油つけて板ぐちかぶり。自然居士(古傳獨稿)に「堂ぐち此所へ昇いて来て居な

くたをまく

くたをまく

くたをまく

くたをまく

くたをまく

くたをまく

ては好色伊勢物語(貞享三年刊)に「女郎の異名を馬といふ心は人を棄ててまると云ふ事なりとぞ、此馬を引廻す者くつわといふとぞ」と見えてゐる。女郎を馬に譬へた例は某林村の文中にも見えてゐれば、この説の如きであらう。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)七に「久津輪、傾城屋の亭主をくつわと云ふは出所いまだ不考、或人のいふは、駒を乗入るをばまじくつわをばまずを最初とす、これ乗馬をしたつる第一なり、この如く歌多の女子を抱擁し、それぞれに仕立つるは傾城屋のわざなり、さかば東西も知らぬ女子親の手を離れ、此らまじわのわざは牧おろしの駒の如くなるによりいふのふかや。異本洞房語圖には、本岡秀吉の雁付の奉公をしてゐた原三郎左衛門が六條の遊女町を取立てたより起つた名だといひ、嬉遊笑鏡には、金銀を贈るを轡をばむるといふと取つた名だといひてゐる。くつわを亡八と書くは、遊里では仁義禮智忠信孝悌の八徳を亡ぶかたであるといふ。(木夫の條の義をも参照せよ)。

くつわづら 把捉つたる腕首はたと 賦放し(振袖始) かつわづら 女名抄に轡をよみ俗にくつわといふ見たり、新撰字鏡に勒又轡をよめり、口輪連の義なるべし、今いふ手綱なりと云へり。貞丈隨筆にくつわづらと云ふは口脇繩なり。

くつをる わづらばかり歎きくつ 間れ見えければ(拾権三) 歎き待つ 間の待遠く、袖も心もくつをるを、とろりとろりのあだ睡り(津戸三郎) どうでも御身がくつをる(三國誌)

くつをる(類)の歌。くつをる。萬葉集卷五、雜歌の部、戀男子名古日「長歌の句に「可多

くつわづら——くねんぼあたま

ちくくつほり 源氏物語桐壺に「口をしう思ひくつほるに」。

くつてい 百千くていなゆたふふな 經て(大原問答) 娑婆世界の佛種を絶ち、魔界となして俱泥劫の本懐を遂げ給へ(釋迦) げにや一念の瞋恚にて、くつてい劫の善根を焼くとこそ承れ(用文章)

くつてい(用文章) 「俱泥」梵語(クニ)である、譯して千萬とも億とも百億とも云ふ。支離義義五に「俱致或云俱泥、此言千萬或億、而其不同、故在本耳。俱泥劫の劫はその條を見よ。

くつていのおんしよ 中尊に觀世音五色の絲を御手にかけ、八軸の妙典・九帖の御書、燻る焼香しんしんと(久盛)

くつてい(久盛) 「九帖御書」善源和尚の觀無量壽經疏を云ひ、九卷ある平家物語「福頂卷小扇箱の條に「中尊の御手には五色の絲をかけられたり……八軸の妙典九帖の御書も置かれたり」。

くつてい(久盛) 袈裟は九條の名に負ふ、東寺の塔のいや高き(曉暎天臺)

くつてい(久盛) 布九幅を纏合はした僧衣。袈裟は梵語(サヤ)である、僧衣のこと。

くつてい(久盛) 「口説」謡曲で感歎、述懐、離懐などの所作をし、心中を述べることをいひ、その所作振を淨瑠璃に應用したのである。其他謡曲から出て淨瑠璃に應用されたものに、次第、シテ、ワキ、ツレ、ウタヒ、などがあつて、夫夫註記されてゐる。元來口説は佛家の聲明の曲調で、怨嘆哀他の曲題であつたのが、淨瑠璃などに應用されては、漸次浮麗なものとなつた。

くつてい(久盛) 嬉遊笑鏡卷六上、昔曲に「口説は長歌にあら

す、(松の菫)彌歌の内にとくまあり、もと平家曲節の名なり、舞なども口説あり。

くどくち この池こそ自らに苦提をすすむる功德池よ、そなたも數珠を持つてか(女御)

くどくち 「功德池」八功德池を見よ。

くどくち 只口頃よの父の子猶そ戀し、不義を存じられば、苦當は死ぬ、隔つも隔つ二人が事、親子は一世な結びなれど、神や異國の佛、さなきだにしと持たぬ身、下卑な人に疎まれない、父母兄弟は根節なりの愛しい子、可愛子母が形見とよ(聖徳太子)

くどくち(聖徳太子) 用ひてある)。この文は離れ離れの詞に含む親心の假名文を、假名をその儘に傍訓として漢字交り文にしたのであるから、假名遣の誤を咎め給ふなよ、これで意自ら明であらう。

くどくち 「親子は一世な結」は親子は一世の縁を見よ。「根節」は「一つ根節の二股竹」を見よ。

くどくち 「ばし御名をくどんしやみと改め(釋迦)

くどくち 「娑婆沙彌」梵語(Gautama Sramanera)である、釋尊出家當時の名稱。祖庭事記に「畢曇、正梵語云娑摩摩、又云畢曇彌に。沙彌は幼童男と譯す。

くどくち 舟手に(國崩)大地・小銃種子島、毒をさしたる鎌を揃へ(國性流後日)

くどくち 「國崩」昔時用いた大砲の名。大友與慶記十八に「先年南蠻國より渡りたる國崩といふ大

石火矢あり。 くにとこたちのみこと 神道にては國常立尊と申し奉り、漢儒は天の生民を降すと云ふ(蟬丸)

くに(蟬丸) 「國常立尊」天地開闢の時ました神。古事記上に「天地初發之時……次成神名國之常立神。

くに(蟬丸) 一つにかたきくにぶしの、咽に涙ぞつまりける(橋樑三)

くに(蟬丸) 「國武士」藩主に陪從して江戸に住む武士に對して、在國の武士を云ふ。

くに(蟬丸) 常江戸脇城國脇まで(薩摩歌)

くに(蟬丸) 「國脇」諸侯の分家。

くに(蟬丸) 麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきて、くれる心の男山(旋舞) 昔の例求塚、これも男と女郎花、そればくれる、これはまた、うねりし松の手を取りて(今宮)

くに(蟬丸) 「曲」くねくねしてある義。くくく物思ひするをいふ。古今集序に「男山の音を思ひて、女郎花の一時をくれるにも。「ふもとに立てるをみなへし云々」を見よ。「昔の例求塚」とある求塚の條を見よ)は情死者の塚なれば、これへくるとへくるは男女関係で煩悶して身を投げたこと、意で「うねる」と同調脚の文飾である。「男と女郎花云々」を見よ。

くねんぼあたま 九年母頭擲つて擲つてばり碎かん(持統天皇)

くねんぼあたま(持統天皇) 「九年母頭」坊主頭を九年母に譬へて云つた語。きんかん頭を金柑頭(當字なれど)の義に取つて、金柑頭と云ふがあるから、九年母頭もあるべきとてかく洒落た語。

美濃國青野原の小松原に高さ十間許の松樹一株ある、これを熊坂長範が物見の松といふ、長範この松に器上つて東西四五里が程を見すまじりて、人馬の足はこび荷物それれの體をまじりて、手下の者に命じ略奪させたこと異本義經記に見えてゐる。

*くまざさ 路地ほの暗き燈籠の、火影宿かる隈笹の、露は螢か蛙の聲の(権權三)

〔隈笹〕笹の一種、長さ五六尺に達し、葉は大にして一枝に五六葉を附け、老葉は黄緑皆白き隈をなす、魚・鱒などに數くに多くこの葉を用ゐる。

*くまなし 月は隈なきをのみ見るものか(兼好)

〔隈無〕隅隅まで照り渡るをいふ。「花はまかりに云々」を見よ。

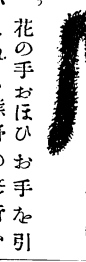
*くまて 此せいすゐな私を熊鷹の熊手の掴みづらのと異名をつけ、八町まちへ名を立て(卯月紅葉)

熊手、熊の手の形に作つて物を掻き寄せる具に熊手と云ふものがある、其に喰へて物を掻き寄せて食物にせうとする意深い者をいふ。

くまのかはのなげさや 熊の皮の投鞘は讃州高松(薩摩歌)

〔熊皮投鞘〕薩摩(高松城主・熊皮の投鞘)松平讀版守頼常の遺物。

熊野修行 花の手おほひお手を引かれた、これも熊野の修行かや(歌念佛)



尼をいふ。「うたぐくに」を見よ。「くわんじん」の條の御進柄杓をも見よ。

*熊野の牛王 熊野の牛王に硯を添へ(御前に差出す(今川了俊) 牛王の裏に誓紙一枚書くたびに、熊野の鳥がお山にて三羽づつ死ぬると昔よりいひ傳へしが(天網鳥)

*くまのみすぢ 流され人のあの鳥で、流す卒塔婆も立つ波に、寄り来るくる縋り繰る絲は、くまの三筋が流れちりける、ちんりちりつる三味線の、渡り初めにし國とかや(薩摩歌)

〔熊野三筋〕熊野は紀州熊野権現をいふ。熊野の山に沈(その條を見よ)の標が三筋立つを、三味線の絲の三筋にいひかけたのである。また三筋には三社即ち本官・那智・那智を

もきかしたるものか。異林子のこの文は、平康頼等が鬼界が島に流され、故郷戀しいまに千本の卒塔婆を造り、濱邊に出て熊野権現などを祈念して、その卒塔婆を流した故事(流され人のあの島で云々)を見よ(櫻)

もので、その御利益で赦免の使者の船の撐つた来るを、縋り繰る縋にいひかけた、永祿頃三絛が琉球から渡來したことにいひつづけたのである。

*くみあゆ 嗟哦の汲帖は道が遠うて間に合ふまい(薩摩天皇)

〔汲帖〕小帖が群れて流れて流るるを木杓で汲取つた帖である。薩摩大井川の汲帖は名物である。熊川道福撰・薩州府志(貞享三年刊)六土薩門、諸魚部に「鯉魚、鴨川并薩摩大井川の産爲味美、丹波所出次之、春木杓水汲取、小鯉群聚流之、以木杓酌取之、是謂之釣鯉、

至其大則鯉并網取之、至秋則設梁大取之」と見えてゐる。これによつて汲帖のことも知るべしである。

*くみがしら 庄屋・問屋・組がしら、扱扱與作と云ふ奴は存知の外の大食(丹波興作)

〔組頭〕五人組の頭目くみしたる條をも見よ。*くみした 組下の二番げえ、金田甚藏・岡軍右衛門・大橋逸平(香庚申)

〔組下〕与組・鐵砲組など各隊の配下にある者を各組下と云ふ。組には大番・書院番・徒士組・小姓番・進物番などもある。これに皆組頭ありし組の者を統管した。

*くみや 室町の絲屋組屋霽ぎ女に、御影堂の扇折、骨身を碎き稼げども(百日骨兵)

〔組屋〕組結、組紐を業とする家。*くみやうかうたい

見よ。*くめん 武士の喧嘩にぐめんはいらぬ(薩摩歌) 忠兵衛はとぼとぼと、外のぐめん内の首尾、心はくもでかくなわや(冥途飛脚)

〔工面物〕對し工夫する義であらう。工夫才覚。「くめん」といふべきは此當時は「ぐめん」というたので、錦文流の傾城八花形にも、「ぐめん」がかしに大方はこれより身代至みつ」など見えたる。

*くもあし 花の時節は杉折の、雲脚・蝶形・洲崎形酒呑香子)

〔雲脚〕雲の垂れたやうな形に作つた杉折。*くもすけ 有る名は呼ばで雲助とは、して先そればどうした事ぞ、おう居處が知れぬといふ事(十二段)

雲助同前の身持となり(卯月紅葉)

〔雲助〕雲が風のまにまに定めなきが如く、定まれる居處なき浮浪人をいふ。賤役に従事した宿無し者、また後には宿歸の駕籠昇の稱。和訓栞に「逃亡無節の徒所定めず宿もなきもの」を雲助といふは、雲の定めなき意にちよも、雲水の義も同じ。

*もたてわき 雲立浦の狩衣(世繼曾我) たてわきの大口そげ取つて(兼好)

〔雲立浦〕「くもたちわき」とも云ふ。雲の立膝るを象つて標にたてわきといふのである。

即ち曲線の中ふくれ、兩端をまつた形を連ねた中に雲の模様を點出したものを云ふ。雲の模様を點出して無いのを立浦といふ。

*くもて 外のぐめん内の首尾、心は脚手かくなわや、十文色も出でく(冥途飛脚) 嘘と誠とささやきの、橋のくもでに物思ふ(夕霧) 水のくもでの橋の上に翁姿の釣の絲、一筋に殺生を心に入れたる風情なり(西玉母)

〔脚手〕脚の足が八方へ出てあるやうに物の交又したることをいふ。千千に物思ふを脚手に物思ふといふ。心は脚手」とあるは色色に物思ひすること、また刀など縦横無忌に振舞すを脚手に切まくるなどいへば、それをか



〔浦立〕

けて蜘蛛かくなわとつづけたのである。水
のくもでは水の凝筋にも分れて流れるのを
いふ。伊勢物語に「水のくも手に流れ分
れて、木八つ渡せるよりでなん八橋とはいは
る。後撰集、巻二の部に「打渡し長き心は八
つ橋のくもで思ふことは絶えせじ」。平家
物語、巻四、橋合戦の條に「蜘蛛手かくなわ十
文字、蜻蛉返水車、八方透きす断りたりけり」。

くものあし 人忍ぶ草道草に、日も
傾きぬ急がんと、又立出づる雲の
脚、時雨の松の下寺町に(曾根崎)
こなたへ來れと薙刀取つて打かた
げ、飛ぶが如くに雲の脚、股を潜り
し葺信が(今川了俊) 天も凍りて霰
散り、雲の脚さへ(急潮に(最明寺殿)
雲の脚)雲の往來をいふ。雲の往來は早きよ
りして、人の足早に急ぐことにもいふ。

*くものい 梢に巢かく蜘蛛のいを
野分の吹きたる如くなり(虎が磨)
蜘蛛のいに荒れたる胸はつなぐと
も(蜘蛛)
蜘蛛の縁。現今關西地方では「くものい」を轉
じて「くものえ」といふ。「蜘蛛のいに荒れた
る云々」はその條を見よ。和訓栞に「くもの
い」蜘蛛の縁也、くものきは蜘蛛網也。

くものうら 親御に疵でも付いたら
ば雲の裏でもいひわけばあるま
い(振袖始) 雲の裏まで尋ねても、
(雲裏)
「雲の裏」目に見えぬ外界。目の届かぬ世界。
くものほたて 「はたて」を見よ。

くもんじよ 八幡公文所の役人(數多
てんでに割竹大地を敲き(雲塵))
「公文所」鎌倉時代に政治をはかり財政庶事を
施行した政所を、その始め公文所と云つた。

この文は理非を亂し裁判する役所のやうに
舊稱を用いて公文所と云つたので、實際は八
幡公文所といふのはない。

*くやう 折角お宿申しても 供養致
さん物もなし(最明寺殿)
「供養」進供養の義。釋氏要覽に「大方廣不
思議境界經云、供養佛者得三大福徳、速成三
阿耨菩提、令諸衆生皆獲三安樂、供養法者
增長智慧、證法自在、能了說諸法實性、供
養僧者增長無量福徳資、致成三佛道」。

*ぐらつぽ 空に知られぬ露の雨、は
らばらほるほる繩目に傳ひ、鞍坪
にたふ涙の十方ぐれ(大經師)
「鞍坪」鞍の前輪と後輪との間、即ち人の尻を
覆す所。

くらつめ 伊豆相模武藏鏡の力革鞍
爪かけてしつかと取り(七加増賢)
「鞍爪」鞍骨の爪先。平家物語「七くちから
としの條に「鞍馬馬十匹許おひ入れられたり
ければ、鞍爪ひたる程にて相過なく向ひの岸
にぞ着きける」。

くらびらき かの着衣始引替へて、
引かるゝ駒の年の始めに藏を聞くによし
「藏附」舊曆上の語、年の始めに藏を聞くによし
といふ日。四時堂其撰撰「滑稽雜談」正徳三年
成(に、「和俗の農工商の類、歲始に藏を開き、
積蓄の金銀米穀に事し、一切の貨財を取出し
て用ひ先て寶賈の限を調ぶ、尤其年の始めな
れば吉日をえらみて庫藏を開くと云なり」。
果林子のこの文は、引かるゝ駒の數に、藏
開をいひかたを盡してある。

くらぶし 膝口よりくらぶしまで、

まつくだりにかげ通せば(百日曾我
「くらぶし」腰の鞆。腰と足首と相繋がる
所に高くなる骨。

くらまのさんしよのかは 折折山へ
御出やれ、何も馳走はおりな
い、昆布に鞍馬の山椒の皮、好い
茶をまうそ(蘇舟) 辛い身過ぎの商
ひは山椒の皮、扱ば鞍馬の火打
石(縁睡天皇)

「鞍馬山椒皮」洛北鞍馬の名物である。黒川道
祖撰「蘇州府志」六、土產門「草木部」に、山椒
皮。洛北鞍馬土人、山椒木不深大小、各三
寸許切之、入大釜煮之、而後剝其皮、
以酸條、和之、買物去、串再浸水、
以刀割旋皮、細細瀝汁、而食之、或糟
醃亦可也、今細細日乾置遠方、又出舟
波者、皮厚而其味爲劣。

くらまのひろちいし 辛い身過ぎの
商ひは山椒の皮、扱ば鞍馬の火打
石(縁睡天皇)
「鞍馬火打石」火打石は火打鎌と打ち合せ、火
口に移して火を取るに用ふる。火打石は鞍馬
の名物である。黒川道祖撰「蘇州府志」六、土
產門上、土石部に、「蘇石。處處出、然鞍馬山
之產爲瑤瑤、發火、鞍馬松尾東山隈造三小堂、
一人居其内、著長調子爲響、有往來之人
則即三響於往來之路頭、求三響石則多少隨
其心、入三響於其内、於三響三響響、應其
響之多少、而盛三響石於其内再仰之、買者
取得之而歸、是謂鞍馬響下し」。

*くらもの 誠にさうぢや、屋敷方か
但くらものか(西王母)
「暗物」往來の男袴を洗んで色を賣る私語の一
である。「くらや」をも見よ。傾城禁短氣(正
徳元年刊三之卷に、「暗者といふは泰公の心

騒げもなく、不斷小宿に見世出してあたまか
ら賣る合端の女、物見遊山の人立のある所へ
は風俗つくりて、浮氣さうり内股の白き所を
見せかけ、是にうかれて男詞をかくれば、こ
はさうなる風をして人なき野邊の方へ行く
を、是は釣れさうな物とそとろつて行き
て其身の釣れる事は知らず、我等がいひま
はしてはんと、白瀬いかな女も釣らぬとい
ふ事ないと言はぬばかりの顔付、是をつたに
して度度逢うて大きにしてやる女なり。次條
のくらくらを見よ。

くらや 堂島新地蜷川茶屋暗屋煮賣
屋で(米朝日) はしげしのくら屋へ
下り、後には濱納屋の蔭(三枚繪)
這出のぬくが暗屋を覗く如くに
て、肩に手をかけ唄祭文(虎が磨)
「暗屋」内證の煙賣屋である。暗屋に居る賣者
婦を暗物といふ。「くらもの」を見よ。西鶴の
好色一代女六に、「暗物と云ふは戀の中宿に
よばれてかりそめの癖を銀二匁、中にも形
見しきを附屬きぬ、爰にたる男は面露渡せ
し親仁の寺奉りにことよせ、養子にきたる女
の萬に氣がねて忍び行くなど、世間恐れぬ人
のたよるべき所にはあらず、此自問なる大女
よりおこれり。年代著聞集、卷之八、元祿十
年の條に「萬年町藤の柳の邊りに閨屋と云へ
る娼家あり、上中下の品ありて、六分八分、壹
匁定る、六分女即ち綿服を着し、八分は器量
自慢然もふくたいを着し、壹匁女即ちのつし
りとしてよし」。

*くらやしき これはこれ信國とや、
さう大名の若殿へ藏屋敷から上げ
らるゝ(女脱切)

くらやしき これはこれ信國とや、
さう大名の若殿へ藏屋敷から上げ
らるゝ(女脱切)

くらやしき これはこれ信國とや、
さう大名の若殿へ藏屋敷から上げ
らるゝ(女脱切)

くらやしき これはこれ信國とや、
さう大名の若殿へ藏屋敷から上げ
らるゝ(女脱切)

くらやしき これはこれ信國とや、
さう大名の若殿へ藏屋敷から上げ
らるゝ(女脱切)

くらやしき これはこれ信國とや、
さう大名の若殿へ藏屋敷から上げ
らるゝ(女脱切)

〔藏屋敷通川時代に諸藩主又は麾下の士や、その他大なる寺社では、其領内から廻送した米穀や特産物を貯蔵し、これを賣脚く爲に家臣を派し其出納を管せしめたる。その屋敷を藏屋敷と稱して、中之島、土佐堀川、江戸堀川などの交通運輸の便利な所にあつて、其屋敷は百内外もあつた。其役人を藏屋敷人と云つた。藏屋敷中には米倉所を設けて米穀の取引をなし、米切手を發行し、又は水を擔保として市人に金の調達を命じることあつた。〕

〔位女郎の位。大夫、天神、鹿經、神、御、北向、など總て女郎の位である。また位についての女郎を賣り料金をもいふ。また位についての女郎の位を問ふは、女郎賣の經路を缺いだ田舎客、野暮のわざである。傾城酒吞童子、第三に、「北向の妻川が袖を控へて、君さん旅のおかか近付きも無きさうな、局へこんせしつぱりと知る人になりんしよ、オラ過分過分客にもならうが、まづ密かに尋ねたい事があると言はせもあへず、尋ねたい事お點ぢや、わしが位か極つた通り五分でござんす、安いものぢや這入らんせ、イヤそんな事ではない」とある、客が密かに尋ねたいと言ふに應じて、我が位を問ふのだと妻川の誤解した早合點する所に、田舎の野暮客は多く位を問ふものなるを知つてゐるからである。〕

〔藏屋敷の拾子なり(舞丸) 〔藏屋敷五位藏人と六位藏人とある、大内裡校書殿内の藏を掌る役人であつて、機軸の文書や訴訟を掌つたが、後には供御の事から傳宣、進奏を除く節會の儀式・侍臣名簿、郵便など殿上に於ける一切の事を掌つた。〕

〔くりり 庫裏に各ありけるが(加増曾我) 〔庫裏〕七堂の一。寺院の厨房を云ふ。後には僧房をも云ふ。 〔くりりあゆみ 座敷へくりりあゆみ博多 〔編歩〕直立不動の姿勢で徐に足を踏出し歩くこと。編出し歩み。おろし歩み。編出しの浮き歩み。 〔くりりからおとし 俱利迦羅落し坂落 (國性語) 〔俱利迦羅落〕平家物語卷七、俱利迦羅おとしの條に、木曾義仲の軍が平家の軍勢七萬餘騎を加賀俱利迦羅谷に攻落したことが見えてゐる。その如くに谷に敵軍を攻落すること。 〔くりりからぶどう 小龍現はれひらりひらりと舞下り、持つたる刃を口に含みくるくると巻きたりしは、くりりから不動の如くなり(二心五戒飛) 牙を研いだる其光俱利迦羅不動と謂つべし(嵯峨天皇) 〔俱利迦羅不動〕梵語(Kalikyo-Nagarata)である。不動明王の變相であつて、劍に纏繞せる龍王の形。國記に「俱利迦羅者此語也。此翻云龍、纏繞劍に俱利迦羅也。成護抄に「俱利迦羅、智尊大龍猛威大火、纏滅九十五種外道邪智之相」。 〔くりりけ 栗毛忽ち泥附毛、沛文鞍もしづまらず(女殺) 〔栗毛〕馬の毛色の名。栗色にて鬣の黒きもの。膚。 〔くりりしめのしめなは 懐中よりくりりしめの注連繩取出し(姪合懸) 〔編注連繩〕編繩の緒の注連繩になれるもの。編繩の緒は具足に編の下部分であつたもの。武家名目抄、甲冑部に「編繩緒、今又たの。 〔くりりはま いふ事なす事くりりばまに

なり、曾我の運長らへて幾何の愛目をか重ね見入(會釋出) 〔はまぐり(越の倒き語) 蛤はその合口密なれども、これを倒きすれば合はぬよりひれた語。翻語するごと。太田長孝、發句まきされ(元禄十四年刊)卷四、冬、節、相軍の句に「談合がくりはまに成る伯父子達」柳亭種彦編「用捨節下巻」に「今もの翻語する事をひては聞え難きより出て、言前後なし義をなさざる響にいひたるが、轉じて彼もの翻語ことなりしなり」。 〔くりりびん 五十許のくりりびん親仁罷出て(縁談天皇) 〔編髪〕江戸時代男子が髪を剃込んで結髪したもので、中間などはこの結髪をしてゐた。 〔くりりん 痛ばしや子を思ふ、恩愛くりりんの川波に、生死五蘊の泡消えず(賀古教信) 〔九輪塔の棟から突出してある柱の周圍に輪形の九つ層あるものをいふ。九輪の下には蓮華の形をした謂花があり、九輪の上には水烟といつて、火の燃え上つたやうな形のものがある。「恩愛九輪の川波」とは、恩愛纏綿九輪のやうに渦巻く川波といふ意。 〔くりり 鶴籠外道と聞えしは、八萬劫が其間四大海の水を耳の孔に納めて、過去七佛も諸菩薩も水に溺して憂日を見せし(用明天皇) 三目八臂摩醯首羅天毗紐天鶴籠僧佉天、一つのしるしを見せ給へ(用明天皇) 〔鶴籠温靈迦(Amitaka)の譯名で勝輪外道の開祖である、晝は色聲を避けて山寂に隠れ、夜になつて乞食に出たので、鶴籠のやう

だと云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

だ」と云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

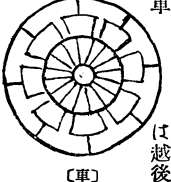
だ」と云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

だ」と云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

だ」と云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

だ」と云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ

だ」と云ふところからこの名がある。唯識述記一に、「成劫末人壽無量、外道出世、名温靈迦。此云鶴籠、晝避色聲、夜跡山寂、夜絶視聽、方行乞食、時人調似鶴籠、因以名也。」「鶴籠僧佉の僧佉(Sankhya)は數と譯す。外道である。支離音義十に「僧佉、此語訛也。應云僧佉、此云數也」。 〔くりり 伴之丞様へたる此うばはぐるなり、件之丞様へたる此うば一言、言入れてつい御祝言濟む事(槍櫻三) 〔ぐるぐる〕などの「ぐる」で輪になる義、一味徒驚、共謀、あひけん。 〔ぐるぐる 六尺模様ぐるぐる、御越るも車は越後の村上(薩摩歌) 駕籠標(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の駕籠標) ぐるま 御紋も車の村上(薩摩歌) 〔車〕車の形を紋所にしたるもの。(越後村上城主、薩摩原式部大輔勝乘の紋所。 ぐるまがかり 武勇の謙信脆く引くべきやうなし、車掛りとて先手より繰引きに引き、旗本と旗本行合ふ様に備へしは謙信が家の軍法川中島) 〔車掛敵を攻める陣法の名。山鹿若狭、兵法神武雄師集に「車がかりといふは、我備をたて切切まはりていくめぐりめに、敵の旗本と我旗本と打合すると積りてかかるを云ふ



也。この文は、花も推して呉れるを俱備
 花にひかけたのである。

くろ 此處の田の畦彼處のくろ、分
 入り駈出で搜せども(大磯渡) 山田
 のくろに落穂を拾ひ(裕泉館)
 「畠の中の塙。あぜ。和名抄に、呼。和名
 久路」。

くろがらし 黒格子の梓巫女参られ
 たりと申しける(三世相) 年季の下
 女を身になして、隠すことも語
 りしは黒格子のつじとかや(卯月也)
 あいころがうしの若巫女の、口と
 口とも寄せまほし(卯月也) 冥途の
 關の黒格子、つじが許へぞ立寄り
 ける(卯月調色) 二十二社廻りしま
 して其ついでに、神子町の黒格子
 お辻の方へ在所の葉が呼ばしやん
 して(卯月調色)

「黒格子」大阪の六萬株といふ地から天王寺寺
 町へ出る處に東へ通じてある狹き町がある、
 これを以前は神子町と云ひ、梓巫女の住家が
 多かった。黒格子と云ふのも此處にあつた梓
 巫女の家で、格子を黒く塗つてゐたから名
 である。この文に「つじ」とあるは黒格子の
 梓巫女の名である。「あづき」とあるは
 「あづき」を黒く塗つてゐたから名である。
 「二を」も見よ。皇都午睡・初編中に「梓巫子」
 天王寺のはやし町は梓巫女の住める所にし
 て二季の彼岸には在所の人のこゝに來りて、
 亡き人の口寄るとして、梓りに其鬼神を招き
 往事を泣く、殊に二季の彼岸にひとしほ哀れ
 に覺ゆかし、このはやし町に住める巫女の名
 を皆めきてをかしかければ書付く、隨屋小女
 郎、隱居藤、黒格子の元家、梅櫻の木の姉、
 藪の内の子、升屋の小女郎、黒格子の万、黒
 格子の嫁、この餘にも數多ある中に黒格子殊

くろ — くろぼし

に名高し。源華百事歌九み之町の條に、「今
 六萬株と云ふ地より天王寺へ町に出る處
 に東へ通ずる狹き道路あり、是を明治以前に
 は神子町と呼び、梓巫女の歌軒住みける地な
 り、其家皆格子つくりにて、表の入口の外に
 は長三尺許の三巾腰襦も木綿にて製し、それ
 に大なる紋を染抜き、假字にてくろがらし
 何何、やぶのは何何なと巫女の名をも染抜
 き、入口の上には辻連綿を張り、黒格子と云
 へるは格子を纏にて染り、家の内の表の間に
 は何か祀りて薄暗くなせり、此に俗人死せる
 者の口寄せと云ふ事を在りて依頼すれば、
 巫女出て坐し前に小さき箱を置き、司を手に
 持ち箱を叩き、まづ神おろしと云へる事を
 なし、次に亡者の來りて言葉を發すことを
 なすに



〔觀所繪圖調訓倫人〕女巫梓

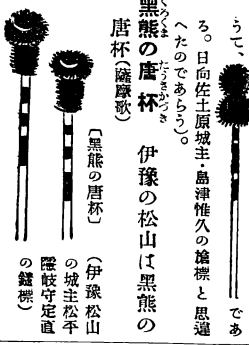
さみ哀
 れに言
 ひ、其
 謝儀を
 請ふ者
 より受
 くるな
 り、彼
 の東園
 にお
 ける
 信濃み
 こと云
 へると
 同様の
 者にて、
 此は他
 に出ず
 して家
 にてな
 すのみ
 なり、維
 新の際
 停止と
 なれり。

くろき 大宮人の御座木や、くろ木
 召せ召せ召されぬか(用文章)
 「黒木木を尺餘に切り、土窟の内に入れて黒
 く染したるもので、大原八瀬の婦女頭上に乗
 せ、新として賣り歩。黒川道福撰・薩州府
 志・土庫門・竹木部に「黒木。多出自路北矢
 背・大原鶴馬、土人入山伐木尺餘、然後作
 土窟於山中、窟内四方積所伐之木、其中央

燒生新、葉乾依之、其色黒故謂「黒木、又
 稱「黒木、或號「燒物、三四日後復出之、
 又新葉并發、毎日村婦戴頭上、村夫負「肩背、
 又牛馬載之、來賣賣京師」。序に云、黒木・新
 を召せと云ふは所謂おはらめ(大原女)で
 る。龍華越あたりの山中の女子「黒木・新など
 を頭上に載せ、若い女子は紺、老女は小紋の
 著物裾高うからけて、白脚絆に草鞋をはき、
 京に出て賣る。花主へ土産として春は櫻夏
 は山吹、躑躅花・秋は紅葉の枝を新に添へて行
 く。古來京都の雅題である。寛文五年刊 版
 心「ひやう(書名未詳)」とある本の第二巻に、
 「水の尾には柴を賣る、是は女の役にして、つ
 れだち出し裝束は、紺の木綿の單物白き木綿
 のしごき帯、足袋や脚布をはきめはいて、姿
 は島の良なり、されども心やせたまに月をも
 をしみ、花を見て片手に折り持ち添へ、京町
 中を榮召せと賣りてこそは通りけれ。

黒熊の片鎌 黒熊の片鎌は高麗ま
 でも隠れなき大隅薩摩の御大
 將(薩摩歌)
 「黒熊の片鎌」(大隅薩摩
 の御大
 將)と
 あれば、鹿兒島城主・薩摩守島津綱貴の先代光
 久が大隅守薩摩守であつたので、それによつ
 て云つたのであらうが、但黒熊の片鎌ではな
 うて、
 日向佐土原城主・島津惟久の槍標と思違
 へたのであらう。

黒熊の唐杯 伊豫の松山は黒熊の
 唐杯(薩摩歌)
 「黒熊の唐杯」(伊豫松山
 の城主松平
 隆敏守定直
 の鐘標)



黒熊の如意寶珠 黒熊の如意寶珠、
 駕籠は輪拔に角の棒、美濃の加
 納の王な
 り(薩摩歌)
 加納城主、
 戸田波守
 光永の槍標。

くろしよみん
 「くろしよみん」を見よ。
くろとごしよ 約束なれば天皇は
 助けんと、取つて引立て黒戸の御
 所に押籠め(大磯冠)
 「黒戸御所清涼殿の北にある殿舎。拾芥抄
 に「黒戸御所。在清涼殿北湖戸西也。故
 實捨棄に「黒戸、東西四間、南北五間也。此
 外に小き間あり」。徒然草に「黒戸は、小松
 の御門位に印かせ給ひて、昔ただ人におはし
 で、常にいとませ給ひける間なり、御新に
 すすめられは黒戸といふとぞ」。

くろび せめて未來のくろびなの
 が
 れ(大經師)
 「黒日舊曆上の語で、萬事凶なる日。大難書
 (寛永十一年刊)に「くろ日。此日よろづわろ
 し」。薩日影解に「黒日一室受死むべし、別
 俗に「元日」といふ日、語事と思ひもれ、別
 して病人を吊ひ、藥を服し、或は鯛炙旅行葬
 禮等には深く忌むべし」。黒格子のこの文
 は、黒日に苦勞をきかされたのである。

くろぶし 膝口よりくろぶしま
 で(百日會)
 「くろぶし」(膝)の轉じた語。足首と膝と相繋
 がる關節で突起した所。

くろぼし 御屋形へも参らす直に尋
 ね参りしが、やたけ心の一念のく

ろぼしを見しらせたり(用明天皇)

満座の人人一統に、これは黒星よき推量(弘徽殿)

「黒星」的の正中にある黒點をいふより轉じて、粗ぶ所、目當所。

くろほろの矢 くるほろの二十四さいたる服かき負ひ(最明寺殿)

「黒保呂の矢鳥の兩翼の下に、連れる羽を保呂といふ、その保呂の黒き鷹の羽で短じたる矢。平家物語・卷八・山門御幸の條に「二十四さいたる黒ほろの矢おひ。」

*くわゆる 彼の人の身をもくろめてやりたい(舟波與作) 一文しやんとくろめて突いて見たれば、悲しやの、八文であつたもの一文はれて七つにして(舟波與作) 旦那を名代に立てばどうくろめうとも自由なこと(産熊)

「黒」隠蔽す。くろまます。ごまかす。あざむく。「黒羅紗の杉形鞘」

*くろろ 細目にあいたる藏の戸をあけて内にそつと入り、くろろなばたと落しける(卯月巻)

「くるる」酒の轉じた語。おとし戸の隠。「くるる」酒の類であらばう。立坊を「たちんば」といふ類である。黒色人。一説に黒船奴とあつて、晋書に「李太后形長而色黒。官人皆謂之黒船」とあつて、印度錫蘭島の都 Colombo の人は黒色なるを以て、凡て黒人

をいふ稱となつたといふ。*くわ 槃特が愚痴も文珠が智慧、終に羅漢の果を得たり(釋迦)

「黒」佛果の略。菩提に同じく、不生不滅の真如の道を證悟した聖智の義。智。聲。*くわ 「くは」を見よ。

*會稽 會稽の恥辱を雪ぎ(薩摩歌) 我が運命の車輪、何時か會稽の峯には廻り上るべき(國性雄)

支那春秋時代、越王勾踐と吳王夫差と戦ひ、勾踐敗れて會稽山に依り降を請うたが、後勾踐の臣范蠡の謀によつて吳を滅して、その恥辱を雪いだ。史記「貨殖傳」に「范蠡既雪會稽之恥」。この故事よりして恥辱を受けたものに對して報復することに云ふ。

*わいけい 店一軒の主になり、商ひもしにせて、親方一家を振舞ふとは、此方ともくわいけい其身も手柄(今宮)

古院本「くわいけい」とある。蓋し「くわつけい」(計許で、その條を見よ)の延びた語で、關西言葉にはかく延びていふ語はその類例他にもある。よろこび歌。歡樂。

*わいじゆ 抑も和漢大臣の位たるを以て槐樹當職の規模と仕る(天智天皇)

「槐樹槐は、えんじゆ」である。周の代朝廷に三槐を植え、三公之に面して坐した故事により、槐樹を大臣の意に用ふる。

*くわいしよ 隣が町の會所、さあさああよびや(博多) 有無の御下知あるまで(外へは)落し申されず、會所へ捕つて押込めよ(堀川波鼓)

「會所」町人の集會所であつて、町年寄の公事訴訟を取扱ふ所。即ち町の役所。「町年寄」をいふ見よ。

*くわいせい 「是の如く我云々」を見よ。*くわいせん 十四端の廻船に、船頭舟子ば襦袢着て(博多)

「廻船」北國東國を往來する大船をいふ。和漢三才會圖卷三四、船橋類、船の條に「北國東國往來稱之廻船、三百斛以上至千五百斛」。たんに「廻」を見よ。

*くわいり 松明櫓の檣皮に移り、折節山風烈しく、諸堂學寮一字も残らず(回祿)に及び候(孕常盤)

「回祿」火災。左傳昭公十八年の條に「釁火于亥冥回祿」とありて註に「亥冥水神、回祿火神」。

*くわうかうけつ 紅葉の秋の夕、黄かうけつの林色を含むといへども朝の霜に衰ふ(賀古教信)

「黃細細黄の絞衣、この衣は黄葉した林を見立てた語である。「紅花の春の朝云々」を見よ。

*くわうせきこう 黄石公が子房に授けし所は未だ學び得ず候へど(天璋伯)

「黄石公」支那春秋時代の隱士である。下邳の相上で張良(字は子房)に六韜三略の兵書を授けて、漢北城山の黄石は即ち我であるとして見えずなつた云ふ。「下邳に授かりし云々」を見よ。

*くわうせん 亡君判官がくわうせん の闇を照すべき(蘇東太平記) 上は碧落下黄泉を探せども求めず(孕常盤)

「黄泉」地中の泉の義。冥土即ちよみぢの意に

いふ。左傳隱公元年の條に「誓之曰、不及黃泉無相見也」とありて註に「地中之泉、故曰黃泉也。服虔云、天玄地黃泉注」。地中、故曰黃泉。

*くわうみやく 四七日は光明(釋迦)

「光明」遍照を見よ。

*くわうみやうしんごん (伊豆日記) 「光明眞言」陀羅尼の名。この陀羅尼を誦すれば佛の光明を得て諸の罪障を除き、西方安樂國土に往くといふによつての名。即ち「唯陀羅尼」無那摩禮彌陀佛他維摩尼鉢離摩訶羅波羅波利多耶耶」の眞言である。

*廣目 (天神記) 廣目天王を云ふ。目が廣大であるによつていふ。四天王の一つで専ら罰惡を主り、須彌西方の守護神である。

*くわうもん 黃門公の御使者梅の井殿とは御自分の儀候な(抱朴)

「黃門」中納言の唐名。黃門は榮・漢の殿名である。宮門の隨黃色であつたので黃門と云ひ、黃龍の内に勤務する者を黃門侍郎と云うた。我國の中納言に相當す。

*くわうやき 我はこれ人間の慧命を斷つ欲天のくわうやきなり(西王母)

「嗔野鬼」嗔野神とも云ふ。衆生を殺しその血肉を食つて生活してゐたが、佛・祇園精舍から王舍城に赴く途中、嗔野鬼に逢うて之を教化されたこと、南本涅槃經卷十五に見えてゐる。

*くわうりん 光琳風の築山(酒吞童子)

くわうりん松の三保が崎(蛙合戦)

「光琳」尾形光琳は京都の人、江戸に行き狩野常信について學び、また土佐の畫法を好み

*くわたい すりめ、ぬかせぬかせ、いざしくわたいに帯解いて裸にせん癒。花の都に美女なきやうになしたる、その過怠の一貫文(饅頭天皇)

〔過怠〕あやまちおこたりの義なるが、轉じて過料をいふ。和訓栞に「くわたい。過怠」と書けり、今いふは過怠によりて贖物を出すの類をいへり。

*くわたく 何時か火宅を出船(薩摩歌) 長へに火宅に遊び共に苦海に沈む(舞臺) 身を知る秋の哀れさも火宅を出づる縁なれや(千正犬)

〔火宅〕衆生の五濁八苦を火に喩へ、吾人が流轉せる欲界・色界・無色界の三迷界を宅に喩へて、三界の衆生が五濁八苦の爲に安穩を得ざること、恰も屋宅の火災に罹りて安居する能はざる如きであるとの意。法華經譬喻品に「三界無不安捨如火宅」。

*くわち 花車が轟く口舌の門、遺手が叩く禿が睡り、皆夢の間の境涯と、破ればぐわちもなかりけり(露門松)

〔月〕見世女郎また端女郎と云ふ類の中でも下位の遊女で、勤銀一匁のものぐわち(月の名義につては、この遊女の勤銀一匁であるので、露門・松風)。「月は一匁」とあるを取つて云うたのである。「しほ(沙)の條をも併せ見よ。後には勤銀高くなつてもなほこの類を用ゐた。御前雜記(正徳二年刊)に「端女郎は鹿麩より下、みせ女郎を云ふなり、替名はけちとも火打とも山家とも局女郎とも端とも小松とも云ふ。位は(一動銀)を一寸とも月とも云ふ。破ればぐわちもなかりけり」とあるは、「月」に「瓦智」をいひかけたのである。

次條をも見よ(「しほ」の條の畫をも見よ)。

*ぐわち 火入の灰に目もくらみ、粹もぐわちも入らば、こそ(虎が屋) ええぐわちな言はでも知れたこと、何程美しうても器量に惚れることとでは(あらぬ(開八州))

〔ぐわち〕「頑露の撥音」の脱落した語で、「おんち」(個事)をおと、「あんも」(箇辭)を「あも」、「れうけん」(料簡)を「れうげん」、「きよしん」(個體)を「きよし」といふの類である。「頑露」はかたくなでおろかな義。野駱不稱。韋應物詩に「飲酒肆頑露」。これを瓦智と書くは常字である。色道大鑑・人倫部に「瓦智。常道不疑のものをいふ」。

*ぐわちぎやうじ 月行事から札取られば大門が出られませぬ(冥途飛脚)

〔月行事〕町人の選舉するものにて、町内の理事にあつかり、官令を傳達することなどを役目とする。大阪舊時の月行事は町内に二人あつて月次通番であつた。

*ぐわつかい 天竺の大金持月蓋と名に高き、さつても香い長者あり(博多) げにや日本のぐわつかいと聞きしはさることぞかし(用明天皇)

須達長者・ぐわつかい長者、五百の長者の費を一匁につけて集めて(佛迦)

〔月蓋〕印度、毘舍離國の長者の名。佛に歸依し彌陀三尊の像を請て祈念し、以て國中の惡疫を除いたこと講觀音經に見えてゐる。講觀音善薩消伏毒害陀羅尼咒經に「時毘舍離大城中有一長者、名曰月蓋、與其同類五百長者、俱詣佛所云云」維摩經・香積品に「於是長者主月蓋從二萬四千人、來入維摩詰舍」。

忍熊大王の姑君と仰

がれ活計に暮せば(日本武尊) 此世の逗留暫しの間、慰みでも食物でも遠慮なしに好みの物望んで、随分活計活計と、帷幕の内にぞ入りける(聖徳太子)

〔活計〕くらしむき、またすぎはひの義なるが轉じて、よろこび。歌麩。白氏文集・老戒の詩句に「老多憂活計」また處分家・家活計。和訓栞に「活計はもとすぎはひの事なるを、歌麩する意に太平記にも、左京の大名衆を結んで茶の會を始め、日日善合活計を盡すと見えたり」。

*ぐわつし 月のありよう云々を見よ。

*ぐわつてんし あつ月の天子の照覽あり、利生は無下にはよもなるまい(大經師)

〔月天子〕月宮の天子、名を寶吉祥と云ひ、勢至菩薩の化現だといふ。蘇祥法華疏・二に、「大勢至名寶吉祥、作三月天子」。露曲・羽衣に「南無歸命月天子、本地大勢至」。

*くわてん 綏したる冠に襲の袖も紅の、くわてんの直衣太刀平(續公風)

〔はなだ(懸)を花田と書いて、これを普讀した語であつて「を」を尾韻と掛いて、これを「びょう」と讀したと同じ類である。「はなだ」を見よ。

襲に襲 時代の金欄鶴菱たすき、花兜(霞舟波興作)

窠紋に襲の散れる時代裂の模様。窠紋は木瓜ともいひ、瓜を輪切にした面の形を紋にしたもの。襲(羽織)に「上の物は白鷺、淨き紋案花形のやうな襲」。

*くわばんぢごく 目前焦熱大焦熱、

火焚地獄の有様もかくやと覺えて凄まじし(女護愚)

〔火焚地獄〕炎或は煙に作る。この地獄に墮した罪人は火に焚きされるより名。焦熱地獄。露曲・歌古に、「火煩地獄は頭に火箱をいたたけは、百部の骨頭より繰繰たる火を出す」。

*くわら 寄手の陣より二十餘の若僧鎧の上にくわらをかけ、太刀提げ小躍して大音上げ(聖徳太子)

〔掛籠〕掛子とも云ふ。兩肩を通して胸間に掛ける小きき方形の切であつて、淨土宗の僧や禪僧の用みるものである。

〔淨土宗掛籠(佛像圖案所載)〕

〔禪宗掛籠(佛像圖案所載)〕

*ぐわりやく 微塵に碎け飛ぶ音はぐわりやくを割るが如くに(珍席盤)

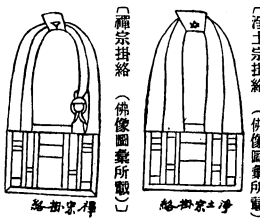
〔瓦障〕瓦・小石・りやくは障の吳音。運歩色業に「瓦障グリヤク」。

*くわりん 敵は勇みの鉦太鼓、風輪火輪天地にあふれ、前後を忘じて行き方なく(日本武尊)

〔火輪〕智度論六に「如旋火輪、但惑三人目」と見え、火を旋轉して輪形をなすものといひ、轉じて火輪の渦巻くに喩ふ。

*くわをぬかす

くはを見よ。



〔禪宗掛籠(佛像圖案所載)〕 〔淨土宗掛籠(佛像圖案所載)〕

丸薬つんでおはするは河津殿の後家御様(本領貫扶)

「九樂摺もちち差かむを紛らすわざで、玉巻拾ふの類である。「たまむしひろふ」を見よ。

*くわんれい 斯波左衛門義將は當家の管領たるによつて(靈女)

「管領」將軍輔佐の職で、鎌倉の執權と同じものである。初めは執事と云つたが後に管領と改めた。管領とは統轄の義であつて職名ではなかつたが、後には定まれる名稱となつた。

くろく 「人でもくひでもない」男でもくひでもない」を見よ。

くゑにち 何くよくよとくゑ日の、悔むもよしな引奇せて(大經師)

「凶會日」舊曆上の語、何事を成すにも凶なる日。大雜書寛永十一年刊に「くゑ日。此日なす事何にても末の遂げにくき日なり、わろし。曆日講釋に、「あしき事集ると云ふ日なれば一切の事に用ひてあしし、まりながら吉日にはあらねども中の凶日なり。假名集註解に、「凶會日。天地の陰陽相會して徳を失ふ日なり」。この文、大經師に纏ある處の語を用めて文を飾つたまでである。

*くゑまんんだら 九會曼荼羅の麻衣、兜巾・篠懸・法螺の貝(藥懸)

「九會曼荼羅」九會には眞言密教に立てる名目で即ち、(一)印會(二)理趣會(三)降三世會(四)降三世三昧會(五)成身會(六)羯磨會(七)微細會(八)供養會(九)四印會である。「曼荼羅」は梵語(Mandala)譯して輪圓具足と云ふ。九會を完全に圖示するものを九會曼荼羅また智曼荼羅と云ふ。謡曲安宅に「兜巾といつば五智の寶冠なり、十二因縁のひだをすまて戴き、九會曼荼羅の柿の篠懸

云々」。

くをんごふ 一心一念の本佛は無念の佛より教を受けて久遠劫、悟あれば迷あり(兼好)

「久遠劫」極めて長大の時間をいふ。億萬劫。「くをんごふ」を見よ。

ぐんだりやしゃ 「どうはうにがうざんぜ云々」を見よ。

ぐんない 羽織も交せて郡内の、未して着の淺黄裏天網鳥) 年は三九のぐんない綿、血しほに染みて紅の(菅庚申)

「郡内」甲斐國郡留郡を郡内と云ひ、その地より郡出する綿絹の名。郡内は貞享初年から元祿享保にわたつて最も流行し、暗の衣裳に九るので、かの三勝も八百屋お七もその最期に郡内を着てゐた。されば郡内の語に深長の意味がある。「三九の郡内綿」といへるは、二十七歳に算筋の郡内綿をきかせた。

け

*け 侍業は皆留守なり、股は御酒の寐入ばな けにもばれにも喜三太とみづから(薩靜)

「寝」なれて常とすること。ふだん着物の義。「寐入ばな」は、ふだんにもよそ行きにも、即ち如何なる場合にもの意。狂言記舟ふなに「こなたなことは寝にも暗にも歌一首と申します」。

*げ 一遍の念佛、一偈の經も讀む間なく(弁橋)

譯して飄然と云ひ、韻文體の經文をいふ。偈院を略して偈といひ、また頌を添へて偈頌ともいふ。漢譯のものは四言或は五言などに疊まれて四句に一偈をなす。

けいあん 四つ當年の御吉けい薄げいあん、めつきり今歳は若うなる(靈女)

お出入の大小名、追従慶安按摩取、お鬢の座取り百千鳥、口嚙るうそ咄し(兼好)

扱も出來た遊ばず遊ばす、米取る能太夫も跣足ぢやと、慶庵とりどり御機嫌伺ふ折節、酒香重々 祈經護ひのけいあん侍、大磯邊方方を晝夜徘徊仕ると承る(虎が磨)

「慶庵」慶安とも書く。輕薄。機嫌を取りおめること。好色大鑑(元祿五年刊)に「輕安は輕薄に同じ」。立羽不角編・俳諧水刷禪、兎手柏の巻に「拳加拵に慶安共の圓機」。俳言集覽に、洞房語園を引きて「承經の頭京橋の邊に慶庵といひし醫者ありしが、療治はかたの如く下手なが能く人に追従し、時時嚙をつきして、誰がいふとなく輕薄がましきもの事をけいあんらしいといひふれて、終にはやり言葉となりしなり」。

けいかい 獨坊主の庵室なれば女人ばけいかいけいかいと、ぎごつなげにぞ返答ある(大原問答)

「けいかい」(結界)の延びた語で、「くわつつけ」(活語)を「くわつつけ」の條を見よ。「ふふ語であらう。序に云、關西言葉は關東言葉ではつまるもの延び、延びるものがつまつていふのが往來ある。「けいかい」を見よ。

けいこうわ 龍猛大師に轉傳し、大くわうちりけいけいけいけい(呂昌波)

「けいけい」は「けんけん」變つた語で、雉子の鳴聲をうつした語である。「はたはた」は雉子の羽叩きの聲。「ほろろ打」は、雉子が翼をこすりてほろほろと鳴し羽叩きすること。「序」に云、玉葉集に「ほろほろと鳴く山鳥の聲きけは」と見え、方丈記に「山鳥のほろほろと鳴く」と見え、ほろほろはほろほろの實鳴く聲ではなうて、翼をこすりて鳴す音をかいくうたのである。

けいけいはたはたほろろち 閉き羽番ひ劍嘴にけいけいけいけいけいけいはたはたほろろち(唐船歌)

*けいこく 爰に傾國好色の遊君(三世相)

「傾國」美人をいふ。また以て遊女をいふ。漢書外戚傳に「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。白居易の長恨歌に「漢皇重色思傾國」。

げいしや 浪華藝者の風俗を橋橋名所に擬へて書集めたる藻鹽草(今官) 藝者の首法師(聖徳太子)

「藝者」歌舞伎役者。藝人。

*けいしやう 帝を始め卿相雲客大夫諸侯に至るまで(大雜冠)

「卿相」公卿と同じ。支那では三公九卿といへども、我國では攝政関白、太政大臣、左右大臣、内大臣を公といひ、大納言、中納言、三位以上の人人を卿といふ。奏議は四位にても卿といふ。

*けいせい 君けいせいといふ者は、此類での王様、それから段段あるうち、おぢやれの身には何が成る舟波與作 母が命が一夜も死んで見せませう(靈門松) こなた業の